

氏 名	寺 島 修 一		
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)		
学 位 記 番 号	第 4584 号		
学位授与年月日	平成 16 年 12 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者		
学 位 論 文 名	院政期歌学の形成と享受		
論文審査委員	主 査 教 授 阪 口 弘 之	副主査 教 授 栄 原 永 遠 男	
	副主査 教 授 村 田 正 博		

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は院政期の歌学をめぐる享受と形成の諸相について考察したもので、「院政期歌学書の形成」を論じた第一部と、「歌学注釈の享受」について述べた第二部に大別され、それぞれ三章八節、二章四節をもって構成されている。

以下に本論文の構成とその内容のあらましについて述べる。

第一部「歌学書の形成」は、第一章及び第二章で院政期歌学書の中から藤原清輔の歌学書に焦点を当ててその本文の形成について論じ、第三章で歌道家における歌集証本の形成について論じている。

第一章「『奥義抄』の『万葉集』享受」では清輔の『奥義抄』が『万葉集』をいかに享受したかについて述べている。第一節では『奥義抄』に引用される『万葉集』本文を検討し、その結果、清輔が用いていたのは、現存本とはやや異なる『類聚古集』であることを確認している。また、現存の『万葉集』伝本に見えない本文の性質を検討して、『万葉集』に依らない引用を認めたとうえで、清輔の改訓と認めるべき例がほとんどないことを述べている。第二節では『奥義抄』の古歌詞を取り上げ、漢字本文の重視を清輔の『万葉集』享受の特徴であると説く。すなわち、第一節で『万葉集』引用本文の性質を整理したうえで、第二節でそれが『奥義抄』の形成にいかに関わるかを確認しようとする。

第二章「『俊頼髓脳』享受の視点から見た清輔歌学書の形成」では、清輔の『奥義抄』と『袋草紙』が『俊頼髓脳』をいかに享受しているかを分析し、清輔の歌学形成に『俊頼髓脳』享受が深く与ったことを論じている。

まず第一節では、『奥義抄』が『俊頼髓脳』を利用して注説を形成する際に、『俊頼髓脳』の注説に対する評価により引用の形式が異なること、また注説が『俊頼髓脳』を承けている場合に万葉歌の引用には『俊頼髓脳』本文がそのまま用いられることを確認している。そのうえで、清輔が『奥義抄』に加えた改訂においても『俊頼髓脳』が関わることを指摘している。第二節においては、第一節を承けて、『俊頼髓脳』との比較により『奥義抄』の注説形成の在り方を論じている。『奥義抄』はその述作において、『俊頼髓脳』の特色である説話の細部の把握よりも、出典に関する知見の充実、歌学における正統な説の探索、例証の付加に意を用いているととらえている。

第三節では、『袋草紙』の『俊頼髓脳』享受を扱っている。ここでも『奥義抄』の場合と同様に、『袋草紙』が『俊頼髓脳』を利用して注説を形成する際に、その注説の評価により引用の形式が異なっていること、またその利用は勅撰集の引用を補完するような形でもなされていることを指摘する。そして、このことが博引旁証をもって知られる『袋草紙』の中で、『俊頼髓脳』がその歌学知識の根幹に位置し、その著述を導くような一面をもっていたと評価している。

第四節では以上の考察を踏まえ、清輔の歌学がほぼ『俊頼髓脳』の内容を包摂し、『俊頼髓脳』を体系化するところに清輔の歌学形成の原点があると説く。清輔は『俊頼髓脳』を自らの歌学書の拠って立つべき足場と

らえ、そこから時代認識の共有にまで至ったという理解である。

第三章「歌道家所持の『万葉集』伝本について」では、歌学書の著述を支える典籍としての歌道家の証本がいか形成されたかという点について、未だ言及の少ない『万葉集』を対象として論じている。第一節では、院政期に存した『万葉集』巻二十の末尾九十余首を欠く本の問題を扱っている。この本は当時の『万葉集』聖武勅撰説に合致する形態であると認められていたことを推定し、この本に対する「証本」「偽本」という正反対の評価は聖武勅撰説に対する評価が反映したものであると推考している。第二節では御子左家の『万葉集』証本の形態について考察している。『万時』及び『古来風跡抄』の内容から、俊成がいったんは九十余首を欠く本を証本と認めながらその考えを放棄し、定家に相伝した本は末尾を補った本であったと推定、さらに広瀬本の校合注記を検討して俊成本の末尾を補った本が基俊本である可能性を想定している。

第二部「歌学注釈の享受」は、後代における院政期歌学の享受の一端に触れたもので、院政期から中世に至る歌学の展開に留意して、院政期歌学書を直接に参照していると思えない例も含め、歌学注釈の享受という観点から考察を展開している。

第一章「用字説の享受」では、歌学注釈に見える用字語注の享受を取り上げている。まず第一節では、室町時代の辞書『温故知新書』の標出語彙の出典注記を手がかりに、その用字表記に『古今集』『伊勢物語』などの古典注釈書が利用されていることを確認し、それを踏まえて当時の辞書編纂における語彙並びに用字の選択に、古典注釈書が深く関わっていることを指摘している。第二節では、『温故知新書』の引用書として連歌学書『私用抄』、関連して教訓書『仲文章』の享受を検討し、歌学注釈の享受とともにある古辞書編纂の場の具体相を解き明かしている。第三節は「勝」「寧人」の用字、及び歌語「いささめ」の漢字表記について歌学注釈の享受という観点から検討を加えている。ついで第四節では『真名本伊勢物語』を取り上げ、その用字に、歌学書や『伊勢物語』古注に由来するものがあることを指摘している。真名本の義訓には注釈書類に由来するものが少なくないこと、表音的な表記と見なされてきた例の中にも、注釈書類を参照することで、表記どおりに解せるものがあることなどを具体的に示している。

第二章「享受史断章」は、本論文としては附章的な位置付けになるが、謡曲《求塚》で知られる「求め塚」という塚の呼称について考察する。「求め塚」は、『大和物語』六条家系統の伝本の本文に発し、源俊頼が『堀河百首』で詠み込んで以来、中世の歌学注釈書類に見出されるようになったことを指摘している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、院政期から中世にわたる歌学注釈の形成と享受の連鎖を歌学書を中心に論じることで、中世の学問の歴史と体系を跡づけようとしたものである。周知のように、歌学研究は、源俊頼を始めとして藤原俊成・定家などを対象に早くから圧倒的な研究蓄積がみられる一方で、例えば藤原清輔らに代表される六条藤家を対象にしては、その重要性にもかかわらず、これまで研究対象としてはあまり顧られることがなかった。伝本整理など、本文研究の立ち遅れと、六条藤家の歌学それ自体の形成が御子左家への対抗意識と複雑に絡んでいて、体系的な史的把握がきわめて困難であったことなどがその背景にある。本論文はそうした中で、院政期歌学の諸相を六条藤家を中心に中世に展望して、「形成と享受」という観点から、この時代を貫流してきた歌学注釈史の十全な把握をめざして用意された論考である。本論文が研究史のいわば欠落を埋める意欲的な論考であることをまず高く評価し、以下、各論の審査結果を述べる。

第一部「歌学書の形成」は、院政期歌学の中核をなした藤原清輔の歌学をめぐる諸論で構成される。

まず第一章第一節では、『奥義抄』に引用される万葉本文が、現存唯一の伝本である中山本『類聚古集』（龍谷大学図書館蔵）とは別の一本に拠ることを実証し、従前の清輔による恣意的改変説を退けている。類聚のありように目配りの欲しいところであるが、首肯できる結論である。

更に第二節では、『奥義抄』の古歌詞がこれまた清輔の任意による抽出ではなく、古今集歌と万葉語の理解と

いう二つの目的意識にそってのものであることを多くの事例をもって検証する。清輔が意図してきた歌語注釈の特徴を見事にあぶり出し、『和歌初学抄』から『八雲御抄』へと引き継がれていく作歌手引の流れを示した述作といえよう。

第二章は、清輔の歌学と『俊頼髓脳』との関係を説いた四節から成る。口伝中心の六条家にあつて、その家の歌学書編纂に腐心した清輔の拠って立った典籍が他ならぬ『俊頼髓脳』であつたことを、彼の著述『奥義抄』『袋草紙』『和歌初学抄』の丹念な分析を通じて明らかにする。清輔の注釈継承の具体的様相を追うことで、『俊頼髓脳』と清輔歌学書との位相差も浮き彫りにされ、意図された歌学史事情の増幅が説得的に果たされている。

第三章は、『万葉集』巻第二十の末尾「九十余首なき本」の「証本」「偽本」問題について論じたもの。

第一節では、御子左家が万葉集聖武天皇勅撰説に立つて、該本を「証本」とするのに対して、六条家では家に伝わる伝本形態と見合う形で平城天皇勅撰説を取り、「九十余首なき本」の「偽本」説が形成されたこと、そしてこのことが六条家にありながら聖武天皇勅撰説に立つ清輔の『奥義抄』に微妙な反映をみせていることなどを指摘する。所与の材料に乏しい中、口伝、秘説の向うに確かな想像性が看取できる好論である。

第二節の広瀬本への流れを追う俊成本、基俊本の位置付けも、俊成、基俊ら各人の所説に深く分け入り、注釈語彙の細部に及んで依拠文献を徹底尋究する寺島氏をもってはじめて提示可能な系統整理といえよう。単なる書誌的伝本研究をこえて、今後の文学史論議を刺激するその基点を示したものと評価される。

第二部「歌学注釈の享受」は、院政期歌学注釈の中世期への展開を論じた諸論で構成される。

第一章の第一節、第二節は、室町時代辞書の『温故知新書』の標出語彙『古今集』『伊勢物語』などの古注や連歌学書『私用抄』、教訓書『仲文章』に拠るものが多いことを指摘し、古辞書編纂の具体的様相について論述する。諸注の成立と展開を辞書史にまで及んで、いわば学芸の統合化を意図した論で、いずれも貴重な知見が披瀝されている。それだけに見出される用字が、中世辞書に登録される施注経緯についても、氏がこの方面の有力な牽引者であるだけに、更に踏み込んだ見解を期待したいところである。しかし、語彙研究を大きく押し進めた労作である。

第三節は、室町時代古辞書に初見する「勝」「寧人」「いささめ」の用字の特殊性に注目し、その淵源が院政期、鎌倉期の歌学書、注釈書にあることを、ここでも資料博搜の裡に提示する。併せて、これら和語と漢字表記との間に意味上のずれがある難読語彙について、誤読、誤解を含め、それらの解釈が家の秘説として一人歩きする享受史を跡づける。第一節、第二節ともども、文学研究、語学研究を統括する視点がいまだ気づかざる事実関係を掘り起こすと同時に、和漢比較語彙研究の新たな可能性をも示して貴重である。

第四節は、『真名本伊勢物語』の用字に、歌学書や『伊勢物語』古注に拠るものが少なくないことを指摘し、そこに真名本編者の表記選択意識を読み取り、もって当該本の新たな説話的展開をみてとっている。後者については論証の難しいところもあるが、示唆深い見解として今後の議論が期待されよう。

第二章は、謡曲で著名な「求塚」の呼称が、『堀河百首』に詠まれて以来、歌学注釈の中で、「処女塚」から「求塚」へ定着するまでを追う。付論ながら、これも語彙研究を説話研究に橋渡した精緻な一章である。

本論文は、叙上の如く、院政期歌学書の一典型とみなされながら、これまで踏み込みが殆どなかった『奥義抄』の所説に立ち入り、その拠り所とその後の影響関係を精緻にしてかつ広く探ることで、院政期から室町期に及ぶ歌学史の位置付けをめざした労作である。一面で注釈学としてあつた中世の学問のありようを、そのありのままに、「形成と享受」史というトータルな観点からはじめて論じたもので、研究史の空白を補い、文学史の総合化に重要な一石を投じたすぐれた考察である。概念規定や説明論述に工夫の欲しいところが僅かに見受けられるが、それらはいわば瑕瑾に過ぎず、本論文が中世学問研究に新たな方向性を与えるきわめて顕著な成果を挙げたとする評価に揺らぎはない。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。